

教_{kyo}文_{bun}研_{ken}だより



第30回 教文研教育シンポジウム

主権者としての教育をどう進めていくか ～子どもたちの主体的な学びを大切にしながら～

神奈川県教育文化研究所は、神奈川県民のため、また、神奈川県の教育文化の向上を目的に開設され、36年が経過しました。また、今回のシンポジウムは、第30回という節目の開催となりました。

今回のシンポジウムでは、「主権者」をキーワードに、公職選挙法が改正され、20歳以上の選挙権が18歳以上に引き下げられたという状況をふまえ、子どもたちに自分が社会の一員であり、主権者であるという自覚・意識をどう育てていくのかについて、小中高校それぞれの実践をふまえた論議が行われました。三人のシンポジストの報告では、主体的に学ぶ子どもの姿が多く語られました。子どもたちが、社会や地域の一員として、また、社会の一役を担うという意識を育てていくための、さまざまな学校での活動の工夫、取り組みが報告されました。





第30回 教文研教育シンポジウム

主権者としての教育をどう進めていくか ～子どもたちの主体的な学びを大切にしながら～

主催 神奈川県教育文化研究所・(一財)神奈川県教育会館

共催 西湘地区教育文化研究所

後援 神奈川県教育委員会・松田町教育委員会・
(一財)神奈川県高等学校教育会館教育研究所

2016年12月3日(土) 14:00～16:30 松田町立公民館 展示ホール

コーディネーター

坪谷 美欧子 (横浜市立大学准教授・社会学)

シンポジスト

齋藤 靖 拓 (県内公立小学校教員)

堀田 清 敏 (県内公立中学校教員)

加藤 将 (神奈川県立神奈川工業高校)

開会の言葉

神奈川県教育文化研究所 副所長 宮坂 正



皆さま、こんにちは。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の司会を務めさせていただきます、神奈川県教育文化研究所で副所長をさせていただいております、神教組の宮坂と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、ただ今より「第30回教文研教育シンポジウム 主権者としての教育をどう進めていくか ～子どもたちの主体的な学びを大切にしながら～」を始めさせていただきます。

神奈川県教育文化研究所挨拶



所長 金子 進一郎

皆さん、こんにちは。本日は年末の大変お忙しい中、お集まりをいただきありがとうございます。この会場がほぼ満員となるほどの皆さんにお集まりをいただき、本当に嬉しく思っております。

この4月から県の教文研の所長をさせていただいております、金子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

教育文化研究所は、開設以来36年が経過しております。来年は、37年目に入ることです。もとも神奈川県民のために、そして県の教育文化の向上のためにということで設立した教育文化研究所です。本日開催のシンポジウムは、ちょうど第30回という節目のシンポジウムを迎えることとなりました。

県の教育文化研究所は、横浜国立大学名誉教授府川源一郎先生を議長として、日々研究に取り組んでいます。そして、カリキュラム総合改革委員会の中で、今年度はどういうかたちで研究を進めていこうかと、そういう話をしてまいりました。年度当初の議論から、主権者としての子どもたちをどう育てていくかということや、また、子どもたちの労働意識がどうなっているの

だろうか、さらには、学校全体のサポート体制、いわゆる「チーム学校」づくりはどうあるべきかなどをテーマとして設定しました。

今回のシンポジウムで「主権者」を取り上げたのは、まさに、選挙法が改正をされて、20歳以上の選挙権が18歳に引き下がったという中で、今日は高校の先生も含めて、小中高として未来を担う子どもたちのいわゆる主権者意識、その意識をどう育てていったら良いのだろうかということを、シンポジストの皆さんと共に、そして会場の皆さんも含めて多方面にわたり意見交換ができればと考えたからです。

ちなみにスウェーデンでは、18歳選挙権ですが、20代の統計を取ってみると、80%以上が選挙に行っていると。その事実とその裏側にある、やはり国の事情、取り組み方、そういうものを学んでいくと、日本とスウェーデンとの違いがよくわかります。

今日は、社会学がご専門の坪谷先生にコーディネーターをお願いしています。未来を担う子どもたちが、この国の未来を担うという意味の中で、主権者意識をどう学んでいくのかということ、そのことを今日、皆さんと共に考えてまいりたいと思っています。

節目の第30回のシンポジウムです。最後までどうぞよろしくお願いいたします。

西湘地区教育文化研究所挨拶

所長 関口 清



皆様、こんにちは。地元、西湘地区教育文化研究所の関口と申します。本日は休日にもかかわらずたくさんの方にご参加いただき、ありがとうございます。12月となりましたが晴天であたたかい天気恵まれ、松田

町からの絶好の富士山の眺めをご堪能いただけたのではないかと思います。西湘地区は、山あり川あり海ありの自然豊かな地域でございます。私は、県外の出身で、現在は閉校となりました、丹沢湖に浮かぶ三保中学校に新採用として赴任しました。その時初めてここ松田町の駅舎に降り立ったわけですが、現在も当時とほとんど変わらない風情を残しており、松田に来るた

び大変懐かしく感じます。先日、西教組養護教員部が、俳優の松坂桃李さんのお父さんで、臨床心理士の松坂秀雄さんを講師として学習会を開催しました。その中で、「息子が、高校時代の多感な時期をこの西湘地域の風土の中で育つことができてとてもよかった。」とおっしゃっておられました。たしかに土地がもっている力というものもあると思います。この地域でお世話になって30年以上経ちますが、ますます気に入っているところです。

さて、現在、経済格差が教育格差に大きな影響をおよぼし、子どもの貧困が深刻化しています。学校でのいじめ・不登校・暴力行為の発生件数は依然として高止まりしており、私たちをとりまく状況は課題が山積しております。しかし、こうした厳しい状況だからこそ、子どもたちの豊かな育ちと学びを保障する「教育という営み」の重要性は高まっていると思います。将来への不透明感が募る中、情報を正しく判断するためのメディアリテラシーも今後一層大切になってくるでしょう。本日は、「主権者としての教育をどう進めていくか」というテーマでのシンポジウムです。私も学ばせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○司会：それでは早速、シンポジウムに入らせていただきたいと思います。シンポジスト、コーディネーターの先生方、ご登壇をよろしくお願いいたします。

それではこの後の進行はコーディネーターの横浜市立大学、坪谷先生にお願いしたいと思います。

シンポジウムの趣旨



○坪谷：皆さま、こんにちは。初めまして。横浜市立大学からまいりました、坪谷美欧子と申します。本日は第30回の教文研教育シンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。これから長い時間ですがけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに本日のシンポジウムの趣旨について、少しお話しさせていただきたいのですが、その前に

ちょっとだけ私の自己紹介をさせていただきます。

私の専門は社会学で、とりわけ国際社会学といひまして、国と国との関係のみならず、今、国境を越える人の移動とか移民とか、そういった問題も非常に大きな問題になっていますけれども、神奈川県内の外国につながる子どもたちの教育の支援、または日本にたくさんいる中国人の人たちのアイデンティティの研究とか、そういったものにずっと取り組んできております。私自身は横浜の希望ヶ丘の出身ですので、本当に地元ですと研究や調査の活動を行わせていただいている人間です。

さて、今日のシンポジウムのテーマですが、今、「主権者教育」とよくいわれていますけれども、本日の私たちの趣旨としましては、単に模擬投票とか模擬議会とか、そういった狭義の主権者教育にとどまらず、主権者として子どもたちをどう育てていくのか、また、子どもたちの主体的な学びを促すためにどういったことができるのかと、広い視野から考えていきたいと思っております。

主権者教育といひますと、どうしても社会科が科目の中心と考えられがちですがけれども、この問題は全ての科目に関連するといひても過言ではないと思います。また、主体的な学びという手法、授業とか教育の指導の手法に関しても、今、アクティブラーニングとか、そういった子どもたちの主体的な学びというもの、非常に重視されてきているようになってきています。

また、社会的な問題に目を向けていきますと、「主権者」という考え方よりも「シティズンシップ教育」、いわゆる日本語で「市民教育」とか「公共教育」とか、そういった問題などにも随分広がっているのではないかと思います。

やはり昨年6月の、選挙権年齢を18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が成立したり、また、今年7月は初めて参議院選挙で18歳以上の投票が行われたということ、こういうことを鑑みますと、戦後の日本の民主改革の象徴であった、1945年に20歳以上に選挙権年齢が引き下げられたのですけれども、そこから数えますと70年ぶりの改正となりまして、かなり日本にとっては日本の民主主義とか、そういった意味では大きな意味があった年であるということ

も、一方では忘れてはならないと思います。

先ほどご紹介があったように、選挙権年齢が18歳以上になるというのは、世界的標準であるのですね。日本のほうが本当にマイノリティになってきていて、16歳以上に引き下げるといったような、ヨーロッパの国々もあるようです。

これに伴って文科省のほうでも昨年ぐらいから、主権者教育の実施というものを教育委員会に求めるようになっておりまして、先生方もたぶんお手にされているのではないかと思いますけれども、総務省と文科省による副読本、『私たちが拓く日本の未来』が出されております。

私も今日の準備もあって、これをいろいろと読んでみたのですが、非常に議論が、政治活動というのは、イコール議会活動だみたいな、非常に政治とか政治参加の意味合いが狭まっているな、という印象を持ちました。また、学校外における生徒の自主的な市民としての活動みたいなことにも、全く言及はありませんでした。

ただ、神奈川県は、こういう主権者教育自体は非常に熱心になされたといわれているところで、神奈川県の18歳から20歳の投票率も非常に高かったというデータも出ています。

また、将来的な問題に目を向けますと、2022年度以降、文科省は高校の教科の「現代社会」を廃止して、「公共」という科目を新設しようという構想もあります。この「公共」という意味についても、「公共の利益」とか「公共の福祉」とかいいますがけれども、何ををもってみんなの「公共」と考えるのかとか、そういう問題も付随して出てくるのではないかなと考えられます。

また、言うまでもないのですが、現在の民主主義をめぐる世界的な潮流というのも、イギリスのEU脱退の国民投票ですとか、先に行われたアメリカの大統領選挙の問題ですとか、やはりいろいろと民主主義の中心の地域であったりとか、またシティズンシップも盛んであったような国というか、そういう問題も一方であります。

その直後に、私は中国の研究をしているものから、中国のニュースを見ますと、民主主義の機能を非常に問うような、ちょっとネガティブに民主主

義を捉えている論調も早速出てきていたりするという、世界的な流れなどもありまして、民主主義における主権者教育という問題は非常に重要な問題で、選挙、投票活動のみならず、児童・生徒が自主的な市民、主体的な市民になることを育てるという視点が、大事なのではないかと思います。

さらに、私の専門に近くはなってしまうのですが、やはり神奈川県といたしますと、外国につながる子どもたちもたくさんいます。そうしますと、日本国籍の有無にかかわらず、同じ地域の将来を担う子どもたちというか、若者、市民という視点での主権者教育というのも、問われてくると思うのです。

そのような背景の中で、本日は3名のシンポジストの先生方をお招きしております。先生方それぞれの実践ですとか課題、そういったところを探りながら、主権者として資質や関心をどう高めていくか、という議論を進めていきたいと思います。

また、やはり小・中学校では主権者教育というの、なかなか実質的な問題として捉えられない部分もあるのかもしれませんが、そういった意味では本日は、高校の先生もお呼びしておりますので、高校生の、実際に投票できる年齢になっている方々もいるというところの、アクチュアルな問題として捉えるという意味でも、非常によい機会なのではないかと考えます。学校種を超えた連携を考えていく意味でも、非常に重要な機会なのではないかなと思っております。

最後に、実は大学でも今、主権者教育というのは本当に手つかずな状態で、大学教員の中の研修会のテーマなどにも、大きな候補として挙がっていたりします。ですので、私自身も今日は得難い機会として、楽しみにしているところでございます。

以上が本日のシンポジウムの趣旨です。今日はこれから、3人のシンポジストの先生方の実践や課題などをご報告していただきたいと思います。

それでは早速、シンポジウムのほうに入っていきますので、まず、齋藤先生からご報告をお願いしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

■小学校からの実践報告

「主権者としての教育をどう進めていくか」
～子どもたちの主体的な学びを大切にしながら～

県内公立小学校教員 齋藤 靖弘氏



皆さん、こんにちは。2011年に、現在勤めております学校で、社会科の研究推進校の発表をしました。そのときの提案授業が、6年生の社会科の「憲法と私たちの暮らし」という単元でした。本時はまさに選挙に関わる

ところで、子どもたちにさまざまな資料を見せながら、投票率を上げていくにはどうしたらいいのかという考えを問いにして、学んでいきました。

その子たちも今は高校3年生です。恐らく何人かは、初めての選挙を体験したものと思います。選挙を体験し、どう見ていたのか、話も聞いてみたいと思いますが、そのときの私の実践の一番大きな反省は、その学びが自分のこととして捉えていたのかというところを、非常に反省しています。今いわれている主権者教育も、その視点が大きいものと考えております。

今日は、自分の立場をさまざまな場所に置きながら、いろいろな活動をつなげてお話しできればと思っております。

この中で、川崎市の先生はいらっしゃいますか。あ

りがとうございます。川崎の話を、まずは少しさせていただいて、それから本校、そして私の一担任としての実践ということで、主体的な学びという視点で、少しつなげながらお話をできればと思っております。

かわさき教育プラン

まずは川崎市の教員という立場で、主権者、主体的な学びというところを見ていければと思っております。川崎市では、「かわさき教育プラン」というのがあります。そのプランの基本理念というのは、「夢や希望を抱いて、生きがいのある人生を送るための礎を築く」、そして、その基本の目標となるものが「自主・自立」、それから「共生・協働」です。

この「教育プラン」で示される基本理念を実現させていくための基本政策の一つ目として、「人間としての在り方生き方の軸をつくる」という政策を挙げています。この政策を具現化していくものが「キャリア在り方生き方教育」ということで、全市一斉に今年度から本格的に始めています。

キャリア教育というのは文部科学省でも推進されていますし、それから次期の指導要領の中でも非常に大きな位置を占めているのかなと、読み取っております。川崎の場合は「自分をつくる」「みんな一緒に生きている」、そして「わたしたちのまち川崎」という三つの視点を大切に、各学校の特色を活かして実現していこうということで、現在、取り組んでいます。

主権者教育で、なぜこのキャリア教育の話から始め



させていただいたかといいますと、文部科学省の主権者教育の検討チームのまとめに、主権者教育の目的というのが示されているのですが、少し読ませていただきたいと思います。「社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力」というふうに示されています。まさにこのキャリア教育で示されている目標と、一致するところがすごく大きいものと考えております。

学校には、「〇〇教育」と呼ばれるものがたくさんあると思うのですが、今、思い浮かぶだけで、先生方、どれだけあるのでしょうか。主権者教育、防災教育、食育、情報教育、消費者教育と、たくさんの教育があります。毎年、新しい教育課題が私たちの目の前に現れて、また増えたなという重荷が肩にかかるようなイメージがあるのではないのでしょうか。でもそう考えると、なかなか重点を絞った教育に迫る子どもたちというのは、育てていくことは難しいのかなと思います。

文部科学省は、キャリア教育という大きな枠の中に〇〇教育というのが含まれていますが、示しています。ですので、キャリア教育という視点で見ると、主権者教育のねらいももちろん入ってくるものと思います。キャリア教育という視点で見て、近いところを主権者教育と位置付けて取り組んでいく、そういうことが一つ、教育活動をつなぐという、大きな成果として挙げられるのではないかなと思います、川崎のキャリア教育というのをまず示させていただきました。

直接関わる場所としては、川崎市も主権者教育に頑張っておりまして、昨年度の末、それから今年度の初めに研修会を行いました。川崎市では「自分の意思が社会を創る」ということをテーマに、主権者教育を進めていこうということで取り組んでいます。

この冊子では、主体的な社会参画の姿勢の育成というのを大切にしましょう、ということが書かれています。二つの視点で示されています。一つ目は「関心」ということです。政治や社会の諸問題や地域課題に関心を持つこと。子どもの姿でいえば、例えば「自分はどう考えるか」「友達や家族はどう思っているのかな」「自分の考えをしっかりと友達とか仲間に伝えてみよう」、こういう子どもたちを育てていくのが大切ではないか。

それから、社会や地域の一員としての「自覚」を高めていこう。これを子どもの姿で表すと、例えば「自分は何ができるかな」、また「自分でできることをしてみよう」「自分の力でよくすることができる」。このように関心や自覚を高めていくことが、主権者に求められる力にも近づいていくのではないかということで、この冊子の最初に書かれています。

これを実現させていくために、四つの活動というのを大切にしていきたいと思いますというのが、載っています。「気付く」「話してみる聞いてみる」「実践する」「振り返る」という四つの活動で単元や子どもたちの学習を整理して、取り組んでみたらどうかという提案です。それぞれ四つの活動にはねらいが示されています。

このように関心や自覚を高めながら、四つの活動を大切にしていって授業をしていくことで得られる達成感や達成感を子どもたちが得ることができると、「またやってみよう」という意欲や、「自分でもできる」という自信につながり、それが自己肯定感の向上にもつながっていく。そういう子どもたちが主権者として、自分たちのまちをよりよくしていこう、そんな子どもたちに近づいていくのではないか、ということが示されています。

現在は川崎では、「社会科」「特別活動」「総合的な学習の時間」の中で指導に取り入れていきたいと思います。これを何とか実現していきたいと考えています。

研究主任としての立場から

各学校には学校教育目標があって、その子どもたちの姿に迫っていけるようにということで、皆さんご尽力されているのではないかなと思います。本校は学校教育目標に向けて、研究のテーマを「自分から動き出し、学び続ける子」というふうに設定をしています。

これは先ほど私がお伝えさせていただいた、自分自身の課題がとても多く含まれている言葉です。学びを自分のこととして捉えるということ、そしてしっかりと問いを持って、「自分から学ぼう」「知りたいな」という子どもたちが、繰り返し繰り返し社会に向けて学んでいく、そんな姿をイメージした研究テーマです。

その中に、「本校の児童に身に付けさせたい基礎的・

汎用的能力」があります。「基礎的・汎用的能力」というのは、キャリア教育でも示されているものであり、次期の指導要領の「資質・能力の三つの柱」といわれているものともとてもリンクする、大切なものになるのですが、簡単にいうと、今、目の前にいる子どもたちが自立した社会人になるためには、どのような力が必要かということを示しています。

川崎ではこれを順番に、人間形成・社会的形成能力を「かかわる力」、自己理解・自己管理能力のところを「わたしを見つめる力」、課題対応能力を「さぐる力」、キャリアプランニング能力を「きりひらく力」ということで、頭文字を取ると「かわさき」となっていくのですが、こういう力を育てていこうという教育を本校では考えました。

ただよく考えると、私自身もいつも思うのですが、自分が一番社会とかけ離れているなとか、社会のことを知らないのは、本当は自分なのではないかなと思うことが、非常に多くあります。ずっと学校という世界で生きてきているので、本当に社会に必要な力って何なのだろうとか、子どもたちはどんな姿になるとそういうところにつながっていくのかな、というのがなかなか見えません。たくさんの資料を見ると、「○○する力」と、たくさん出ていると思うのですが、「力」だと、私たちは結局やらずに終わってしまうので、ではそれを子どもの姿で表してみようというのが、下の図で描いたものです。

こういう子どもたちを、卒業する3月までに育てることができたら、こういうことができるようになったら、未来につながっていく子どもたちになるのではないかなと考えています。これを、主体的に学ぶということを大切にしながら、しっかりと獲得させていきたい、というのが本校の取り組みです。

ここまでは川崎市の私、それから勤務校の私という立場でお話しさせていただきました。

学級担任としての実践

最後は私の学級担任としての実践ということで、いくつかの施策を入れさせていただきました。今は6年生の担任をしています。主権者というテーマで表すと「6年1組は 私が創る 私たちで創る～よりよい社会

の実現に向けて、意思をもって行動できる子～」、こういう子になっていったらいいなと思って、日々、子どもたちと一緒に学んでいるところです。

主権者教育の視点における目指す子どもの姿を、このように示してあります。資料を見ていただくと、所々に「子どもの姿」という言葉で出てきていると思うのですが、やはり具体的にしていこうということを今、とても大事にしています。具体的にすることで、授業のねらいが明確になるのではないかな、しっかりと私たちも評価できるのではないかなということで、このように具体的に、子どもの姿を出すようにしています。

今日、お伝えする実践は、「学級経営」という視点と、それから「社会科」という視点で、報告させていただきます。

学級経営の中で私自身が大切にしているのは、「考え続けられる問い」というのをつくって、それを自己評価、総合評価を繰り返していこうということを大切にしています。学級目標をたぶん各小学校の先生はよく作られている、中学校の先生もしっかりと作って、やられている学校を、私もたくさん訪問させていただいて、見ているのですが、この目標というのをすごく私自身は大切にしています。

ここに向かっていかどうか、常に子どもたちと考えるということを大切にしています。これがよりよい学級をつくっていくという基本になって、学級で学んだ「自分たちがつくる」ということが、「これからの社会をつくる」というところにつなげていけるのかなと考えています。

この目標に合わせて、1年間の学級の活動、それから学校行事、委員会、さまざまな子どもたちとの取り組みをつなげて考えているようにします。

日直が「今日の『越えて』」ということ、「学級目標に対して、今日はこんなことを頑張ろうよ」などと話をして、みんなで今日を大事にしようねと取り組んでいます。

また「この学級目標に対して足りないところは、僕たちのやる気だ」と言った子どもたちが、「やる気アップ集会」というのをやりたいということで、ではどんな集会ができるかなといって、話し合いをしました。

友達を認め合うような活動をしたいということと、自分たちのPRできるようなCMを作りたい、それか

ら本当にみんなで楽しめる集会を、遊びをしたいとか、そういうのが出てきました。動画を作るのにあと4カ月、どうしようかなと考えているところですけど、何とか実現させてあげたいと思います。

それから1年間の子どもたちの活動をファイルにしています。ここには4月からいろいろと取り組んできたふりかえりカードを積み重ねながら、子どもたちの振り返りというのをためています。

自分たちの成長も振り返りながら見るができますし、それからこの振り返りをお互いに交換し合って、付箋に「君はこんなところを頑張っていたね。私も見ていたよ」というような手紙の交換もしています。子どもたちは自分が努力したところを友達に認めてもらうというのが、集団をつくっていく中でとても大切なことだと思っているのですが、これは社会に出ても同じかなと思っています。

相手が頑張っていることを「一緒にやろうね」とか、「私はこれを大事にしているけど、あなたは何を大事にしているの?」というところに目を向けるということも、主権者の視点で見てもらえるかなと思っています。このような学級活動を大事にしております。

「学級」という集団の中でよりよいクラスをつくるために、自分には何ができるかを考え、行動することを通して、振り返って新たな課題を見いだす、こういうことが主権者教育にもつながっていくのかなと考えております。

次は社会科の実践を二つ持って来ました。一つ目は「戦争から平和への歩み」、歴史学習の最終単位になるところですけど、ここに示しているのは単元構想図といって、指導計画とはまた違い、子どもたちがどうやって学んでいくのか、問題解決的な学習をどう進めていくのか、というのを図で表したものです。

社会科の目標、歴史単元の目標の中で、もちろん内容の理解は大事ですが、「歴史を学ぶ意味を考える」ということが指導要領にも示されています。この「歴史を学ぶ意味を考える」ということは、今を知ることや、これからの社会をどうしていきたいかということを考えることにもつながっていくのではと考えています。

社会科ではこんなファイルを作って毎単元、学習のまとめをこういうふうにししながら、最後の振り返りと

いうところで、その単元で学んだ、歴史を学ぶ意味というのを書き続けてきました。最終単位では8カ月学習してきたことをまとめて、自分はどう捉えたのかなということをみんなで振り返っていきました。

1人の子どもは最後にこんなことを書きました。「いつの時代もさまざまなことがあったが、その日本を古くから支えてきたのは国民だと思います。もちろん過去のことを学んで明日に活かすことも大切だが、新たなことを取り入れて、その時代の流れを読み取り、今、必要な社会をつくっていけるようになったらいいな。そのために歴史を学びたいな、学ぶ必要があるんじゃないかな」と書いている子がいました。

この後、政治単元を学習するのですが、国民が得た主権というものを自分たちのこととして捉えて、政治学習を進めていきたいと考えております。その政治学習の単元が「憲法と私たちの暮らし」ということで、単元構想図というかたちで示させていただきました。

昨日、1時間目に入ったばかりなので、今日は実践でこういう成果が得られたということは報告できないのですが、学んできたことをしっかりとつなげて、せっかく得た選挙権、政治に参加するという権利なのに、実は投票率というのはすごく下がってきているのだとか、それから選挙に対する意識というのは、結構、国民の中で違うという資料を見せました。

小さくて申し訳ないのですが、上のほうの右側の資料は、明るい選挙推進委員会のホームページに出ているのですが、選挙に対する意識の調査です。左側から、選挙は義務だと感じている割合、それから選挙は権利だが棄権すべきではない、その次が個人の自由だ、最後はその他となっているのですが、本当に70代、80代の方は、選挙は義務だと思っている。それから、60代、50代、40代、このあたりは権利だが棄権すべきではないという割合が多くて、それより下の若い世代は、個人の自由だと考えている。

この調査の結果を、推進委員会は投票率でも示していますけど、やはり自由だと思っている人たちは、投票率が低いという結果も出ているそうです。子どもたちが選挙について考える、政治に参加するってどういうことなのかなというのを、憲法の学習を通して実感できればなと思っています。

そのようにしながら、よりよい社会の実現に向けて

自分にできることは何か、小学校なりに考えていくことが、高校につながる基本ともなってくるのではないかなと考えています。

今日は成果と課題も、というお話だったのですが、まだまだ実践中なので、なかなか課題というところは見えていないのですが、やはり一番はこれを実践するということがかなと思っています。主権者教育をやろうとすると、なかなか実現できないことがあるかもしれませんが、やはり今やっている教育活動を見直して、これにつながるのだと思って、少し意識して取り組むことはできるのではないかなと考えております。そのように進めていければと考えております。

では、以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

■中学校からの実践報告

「社会科（地理的分野）・学活で行う 主権者教育の実践」

県内公立中学校教員 堀田 清敏氏



皆さん、こんにちは。地元の中学校で社会科の教師をしています、堀田といいます。今日は地元開催ということもありまして、すごく緊張してしまして、まとまらないかもしれませんが、私がこれまで、今日までやってきた実践をうまく伝えられたらなと思っています。よろしくお願いします。

まず初めに、私が今勤めています中学校の紹介をしたいと思います。今、ここが松田町というところですが、中井町は、ここから車だと20分ぐらい、秦野のほうに行ったところにあります。人口は、今は1万人を切って、9900人ぐらいという小さな町で、二つの小学校と一つの中学校というところ。現在、中井中学校は270名弱の生徒がいて、ひとクラスが27、8名、多くて30名程度という、そのような小さな学校で学んでいます。

主体的に生徒が学ぶ授業づくり

本校は、2008年に「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」という指定を受けまして、ここで先生方の授業改善と、あとは生徒の学び方を改善して、今日のテーマにもありますが、主体的に生徒が学ぶ、そういう授業づくりの研究をしてきました。

私は、2008年はちょうど新採用で別の中学校へ採用された時で、このときはまだ現在の勤務校がこういうことをしているということは分からなかったのですが、今から4年ぐらい前に赴任しまして、そこで生徒が主体的に学ぶという姿を見まして、本当にびっくりしました。

全ての授業、全ての単元とはいいませんが、少人数での話し合い活動がすごく活発で、模造紙とペンがあれば、みんなでわいわいがやがややりながら意見をまとめて書く、そして発表するということができる学校で、非常に驚きを最初は感じました。

このような話し合いの技術というのは中学校だけでなく、小学校の6年間でも非常によくやられていて、小学校の先生方の実践が中学校でも非常に役立っていて、中学校の先生としては、小学校の先生にすごく感謝をしているというところがあります。

また、生徒会活動も活発で、「全校ワールドカフェ」というのをやりました。1年生から3年生まで縦割りの班で、グループを全校で60ぐらいに分けます。例えばいじめをなくすにはどうすればいいとか、全校が仲良く生活するにはどうしたらいいのかということ、生徒会本部が中心となってワールドカフェをやって、生徒会長がファシリテーターとなって生徒の意見をまとめて、ではこれからこうやっていきましょう、などという活動も自分たちでできるという、そういう学校です。

非常に話し合いの基礎ができていまして、主体的に学ぶ基礎づくりというのはすごくできていて、授業をするほうとしてはやりやすい環境があるのかなと思います。

主権者教育といいますと、どうしてもやはり社会科で、しかも中学校だと3年生の公民の授業というイメージがすごくあると思うのですが、公民だけではなくて、地理とか歴史とか、あるいは社会科だけではなくて、

他の教科の活動でも、主権者教育というのができるということを最近感じまして、いろいろな研修会や研究会などに参加しますと、やはりこれも主権者教育につながっていくのかなという報告を聞いたりして、何とか取り入れていきたいという気持ちはあります。

今日は、私は2年生の担当をしていますので、2年の自分のクラスの実践と、地理の実践を紹介したいと思います。

地理的分野での主権者教育

最初に、地理の実践を紹介したいと思います。2年生では日本の地理を学んでいきます。まず日本が地球上のどこにあるのかとか、日本の都道府県はどうなっているのかを学んだ後に、世界と比べてみた日本の地域的特色ということで、自然や人口、資源・エネルギーと産業、地域間の結び付きというような視点で日本を世界と比べて、おおまかに捉えていきます。

この学習が終わった後に、九州地方から順番に7地方区分に沿って、日本の地誌というのを学んでいきます。その後に身近な地域ということで地形図を使って、自分が住んでいる町とかを学習をしていくのですが、今回はその中で「世界から見た日本の人口」というところの実践を紹介したいと思います。

ここでは「単元の展開」ということで、日本にはどんな人口課題があるのかということを学習していきます。今回は3時間目、4時間目、5時間目の実践を紹介したいと思います。

まず日本の過疎や過密の問題を、教科書や資料集を見ながらワークシートにまとめるということ、そしてどんな課題があるのかというのを全体で確認をしました。

その後、4時間目として、全国の過疎地域の町おこしや村おこしにはどのようなものがあるのかということで、インターネットを使って、過疎地域の活性化のための実践例を探して、調べてみようというを行いました。1人1台、パソコンは使える環境にありますので、こういう活動もすごくしやすい状況にあります。

それで、それぞれが関心のある地域を、取りあえず検索してみよう、「町おこし」とか「村おこし」というキーワードを入れて、検索してみようという指示を与えて、

生徒一人一人が「こんなことがあるじゃん」、「神奈川はどうなのかな」とか「関東地方はどうなのかな」などということをまとめます。

こうやっていろいろな地域でいろいろなことをやっている、特にアニメとコラボレーションしている地域が多いということにやはり生徒は関心を持ちまして、「いいな」とか「中井町でもやったらいいのにな」などということを話しながら、全国の町おこしに関心を持たせることができました。

私の地元は秋田なので、秋田の羽後町というところが、萌えキャラというのをお米の「あきたこまち」のパッケージにされていて、それが全国から注文が殺到しているということを知った生徒に、私は自慢げに「じゃあ今度、お土産に買ってくるよ」などと言いながら、授業を行ってきました。

これが最終目的ではなくて、最後の5時間目のほうですが、では振り返って、自分たちの中井町の地域を活性するにはどうしたらいいのか、ということを考えました。

「中井町をさらに活性化するためのアイデアを出してみよう」ということを課題として、前時でやった全国の町おこしの例を基にしながら、中井町ではどうやったらいいのかなということを考える授業を行いました。

そのときに何もなければ何も答えられないということなのですが、中井町のホームページには、役場のほうに統計のページがありまして、そこにはさまざまなデータがあります。例えば中井町の人口の変化とか、あるいは今、中井町は外国人の労働者が非常に増えている、その外国人がどの辺りから多く来ているのかなどというデータがあったりとか、あとは工業ではどんなものがあるのかとか、そういうような。

また別の資料を使って、そこから中井町の現状は何か、そこを考えさせて、その現状を踏まえて、どんなことを行っていったら、町がさらに活性化するのかなと。それがどのように中井町にいい影響を与えるのかということを考えさせて、いろいろとグループでアイデアを出させた後に、全体でどんなことができるのかということを発表させて、終わりました。

「中井町をどうすればいいか」というと必ず出てくることがあります。何が出てくると思います？ 中井町に必要なものは何かとか、中井町をよくするために

は何が必要なのかと。

中井町を知らない方は分からないかもしれませんが、必ず出てくるのが「鉄道を通す」ということなのですね。中井町は鉄道が通っていないんです。何をしても小田急秦野駅、あるいはJRの二宮駅の方に出ないといけないので、「鉄道を通す」ということを必ず生徒は言うのですね。

それ以外でという、やはり中井町のよさというのを生徒一人一人が考えて、さらに、さっきも言いたけれども、全国の取り組みなども考えながら、いかに中井町にあるものを使って町をよくするとか、こうやったらもっと町が変わっていくという、彼らなりのアイデアを出して、町おこしの提案をしました。

本来ならばこれで終われば終わるような授業と、私は考えていたのですが、今度は12月の21日に、これは町のほうから提案がありまして、町長と中学生が中井町の将来を考えるという企画がありまして、実際に体育館のほうに中井町の町長がやって来て、そこで全校生徒とパネルディスカッションみたいなことをして、町政に中学生の意見を取り入れるという企画が、今、計画されています。

僕はそのとき、「やった！」と思いました。せっかくこうやって子どもたちが出したアイデアを町長や町に少しでも、全部を採用してとは言いませんけれども、こういう子どもたちの声を、町に届けさせる絶好の機会だなと思ひまして、生徒会本部の担当の先生が中心にやっていますが、すぐに私は今まとめたものを担当の先生に渡して、これを何とか活かしてほしいということ伝えました。

昨日、専門委員会が開かれまして、専門委員会のほうでも、町の活性化のためにという提言を各委員会から出しましょうという話し合いが行われて、そういうのも含めて、21日の町長とのパネルディスカッションに向けて、今、計画を進めているところです。

生徒自ら考える町おこし

そういうことをやることで、ただ単に思い付きでとか、そういうことじゃなくて、それが実際に町のほうで少しでも、何らかのかたちで取り入れられたら、本当に自分たちの声が町に届いたということで、生徒は

中井町をもっと好きになれるという、自分たちも町の政治とか、地域社会に関われるのではないかなという、意識や自覚が高まるのかなと、すごく期待しています。

定期テストにも、町おこしのアイデアを考えるということを出してみました。ただ単に町おこしを考えなさいということじゃなくて、学習したことを基にして中井町と同じような、このA町というのは私が勝手に考えた、架空の町なのですが、中井町に似ているようなところを設定しまして、これで「あなたはどんな町おこしをしますか」という問題を出題しました。ここは「思考・判断・表現」という観点でやったのですけれども。

そうしたら、テストという限られた時間ですが、具体的に自分のこととして、町おこしのこととかを考えることができるかなと思います。ここまでは社会科の地理の分野での実践です。

ほかにも私の地理の実践では、例えば地形図を使ったときに、地形図から町の特徴を読み取って、それを活かした町づくりはどういうふうに行うことができるのかというのを、前任校でやったりしました。それを公民の地方自治の授業へつなげていって、2年生のときにこういうことをやったよね、3年生の地方自治でこういうことが、あのときにリンクするよね、などということをやったこともあります。

学級活動での主権者教育

先ほど小学校の先生も仰っていましたけれども、まずはやはり主権者教育という、自分を主権者としての意識を高めるには、やはりクラス経営という、クラスづくり、というのはすごくベースになるのかなと思います。

6月下旬の実践なのですが、「自分たちの学級生活を振り返ろう」というテーマを設定して、学級のよい点や課題を見つけ出して、改善策を具体的に話し合っ、それを実践していくということを行いました。

どこの中学校や小学校でもやっているようなことだと思いますが、ここで大事にしたいのは、人ごとじゃなくて、それが自分も関わっているのだと、自分たち一人一人の問題として学級の課題を考えて、それを一人一人が改善して実践し、さらによりよいクラスをつ

くっていこうということを考えました。

まずは、どこの中学校でも使っているかもしれませんが、神奈川県『中学生生活と進路』というテキストに、「中学校生活を振り返ろう」というページがあるのですが、そこで自分たちのクラスの課題を見つけよう、現状を見つめようということで、学級が楽しい雰囲気だとか、思ったことを何でも発言できる雰囲気だとか、授業に真面目に取り組む雰囲気なのかをイエス、ノーで、アンケート的にチェックしてもらうがあります。これを全員がやって、イエスの数が多い項目を取り上げて。

私の学級では課題として、授業に真面目に取り組む雰囲気がないというのが一番多かったんですね。一番少なかったのはいじめなどの問題がない、ノーということでみんなが仲良く。これはすごくほっとしました。みんなが仲良くできるいいクラスだなと、そのとき思いましたが、ただやはり授業に対しての、真面目に取り組むような雰囲気がないというのが、全体が共通して考えている課題だということが分かりました。

そこで、グループで模造紙を使って、意見交換をしようという実践をしました。普通の模造紙の半分の大きさで、各班にペンを渡し、今日の課題、「授業に真面目に取り組むにはどうすればいいか」というテーマを出して、それぞれこれは5人ないし6人の生活班でやりましたが、自分たちそれぞれが思っている授業に対する問題点、そして横に改善点、こういうことをしたらいいんじゃないかということを、一人一人が自分の意見を書いて、それを班長の指示でまとめる、ということを行いました。

その後、それぞれ模造紙を黒板の前に持って来て、班長ないしは班員で発表をさせて、私たちの班はこういうことが課題としてあるので、こういう点を改善させていきたいです、こうやっていけばいいのではないかと、ということを提案するというかたちを取りました。

こういうことをやりながら、ただ班に発表させて、課題を見だして改善策を挙げるだけではなくて、それを今度は、僕の中のキーワードですが、「自分事」ということで、自分のこととして、それをどう実践し変えていくかということで、一人一人、自分がどう取り組んでいくのか宣言するということを、小さなカードに書かせました。

例えば、授業中に寝ないとか、授業では積極的に発表するとか、そういうこと。一人一人が自分としてできることをそれぞれ書いていって、それを今後、明日から、次の時間からの授業で実践していこうか、という活動を行っていきました。

本来であればこれを教室に掲示して、また振り返りの時間をつくって、できたかどうかというのをやりたかったのですが、そこまでなかなか時間が取れなかったもので、そこがちょっと課題として挙げられますが、ただこの授業を行ってから、自分のクラスだけではなく、ほかのクラスも少しずつ、授業に対する取り組み方とか姿勢というのは、変わったのかなという気はしています。

ということで、クラスでのクラス経営の中も含めての、自分のこととして課題を捉えて、それを実践し、そしてみんなでよりよい雰囲気をつくっていく、というのができたかなと思います。

今後に向けてということですが、最初に言いましたけれども、どうしてもやはり「主権者教育＝社会科＝公民」などということがあるのですが、そうではなくて、いろいろなところで自分の思っていることを相手に伝え、そして相手の気持ちを取り入れて、そしてそれでまた対話をしていくなどという、主権者としてのベースをつくっていくのではないかなと思います。

なかなかできそうでできないのが、この実践だと思うのですが、それを今後はいろいろな機会に、いろいろな場面で取り入れながらやっていき、そしてそれを、他教科でも取り入れて、広めることができたらいいいかなと思います。

私の来年の個人テーマとしては、主権者教育を中心とした授業改善を考えています。これからもよりよい授業を、主体的に生徒が学べるような授業を実践していけたらなと思います。

これで私の報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

■高等学校からの実践報告

「小中学校における主権者教育をどう進めていくか
～子どもたちの主体的学びを通して～」
－高校教育の現場からの呼びかけ－

神奈川県立神奈川工業高等学校教員 加藤 将氏



こんにちは。神奈川県立神奈川工業高校の定時制で教員をしております、加藤と申します。地歴公民科の教員の立場として、今日はお話しさせていただきます。よろしくお願いします。

初めに自己紹介を兼ねて、お話をさせていただきます。「高校の専門は？」と言われるのですが、私は日本史が専門で、日本近代史などをやっています。逆になんでここに私が、というふうになると思います。それには私の生い立ちも実は関係しています。そんなところから、今日はお話をさせていただけたらと思います。

実は今年のちょうど12月ぐらいに、社会の先生などは分かるかもしれませんが、一遍上人に関係する藤沢の遊行寺に行きました。遊行寺宝物館でたまたま『一遍上人絵伝』をやっていたので入ろうとしましたら、いきなり入口のところで、職員に何と言われたかという、「すみません、議員さまですか」と言われたんですね。

全然、気付いていなかったから、私は「え？ 何を言っているんですか」と心の中で思ったら、実はその日は休館日で、藤沢市の議員にどうやら開放する日だったらしいのです。そんな日にたまたま入ってしまいました。年齢的にいえば、私は今年で36になるのですが、議員になっている人がいてもおかしくないから、間違えられたのかなと思いました。もちろん、入館できませんでした。私の出身は神奈川県葉山町です。先ほどの堀田先生じゃないですけど、葉山にも鉄道がないんです。小学生ぐらいから「鉄道があったらいいのにな」と思いながらも、さっきの話を聞いて、どっちがいいものかと思いながら聞いておりました。

神奈川県出身で、地元の小学校を出ております。自

分がもともと社会科や歴史に興味を持ったのは、割に葉山というところにはいろいろな人、歴史に登場するような人の別荘があったりということで、そんなところから歴史とか、社会科に興味を持ちました。

勤務先というのは、実は神奈川県以外にも勤務したことがあります。私が採用試験を受けようとしたころ、神奈川県の高校採用がありませんでした。そのため、千葉県で採用されました。千葉県に行ったときに、高校で採用されたのですが、県の方針で小学校へ回ってくださいということを言われまして、千葉県船橋の小中学校で3年間、そして千葉県の高校で4年間勤務しました。

なので、神奈川県の小中学校の現状は分かりませんが、小中学校でも3年間、そして高校は千葉、神奈川トータルして、今年、8年目に入りました。小高の両方を経験した立場で今日はいろいろとお話しさせていただきたいと思います。

私も6年生の担任をやったことがあるのですが、齋藤先生が公民に入っているという話を伺って、私が6年担任をやったときは、なかなかまだそこまでたどり着かなくて、しっかりカリキュラムどおりにやっていらっしやると私の反省を兼ねて思いました。

3番目ですけど、社会科との出会いというところで。先ほど話したように、私が小学校3、4年生の時、葉山町でも副読本がありまして、そこでこんなに歴史上の人物、要するに教科書に登場するような人物と地元というのが関わっている、というところに興味を持ちました。

そんなところから一つは政治とか、歴史というものに関心を持ったということ。そしてちょうど私が小学校ぐらいのときから中学校ぐらいにかけてだったので、ご存じの方もいるかもしれませんが、私の住んでいる葉山町の隣の逗子市というところで池子問題というのがあり、地方自治、住民自治というので注目が集まりました。

私は、小学校から中学校時代にかけて池子問題をみていて、「これって一体何なのだろう」、「リコール」という言葉を聞いたりとか、よくしょっちゅう隣の市がニュースになっているけど、よく分からないな、というところから政治的関心というものがあったと思います。さっきの話じゃないですけど、「学びというの

は自分が、あるいは学校が、あるいは家庭が、社会が、いろいろなところに関心を持たせていく」のかなというのが、自分なりに思ったことです。

実は小学校5、6年のときに、池子という所の話ですが、友人が、「池子についてどう思う？」って、小学校6年生の私に聞いたんです。それで、当時は「え？何を言っているの」みたいに思っていたんです。その彼は今、市議会議員になっていまして、議員になってから、その話を本人にしたら、「そんなことは覚えていない」と、言われてしまいました。おそらく、そんなことも政治や社会科に関わるきっかけになったかもしれません。

ブライスの「地方自治は民主主義の学校」ということをよくいわれますけど、やはり身近なところで肌をもって感じるということが大切なかなと思っています。

先ほど触れましたけど、自分自身が小学校や高校の現場と、両方を経験した人間で、中学校については私も経験したことがないので言えないかもしれませんが、自分がいろいろな校種を経験した人間として、今日はお話しできたらと思います。よろしくお願いします。

主権者教育～高校教員としての取り組み

右側に持って来た資料はちょうど去年、主権者教育というのが学校現場に入っていく中で、二つの面白い意見が新聞に掲載され、実は高校教員として、この二つの意見に両方とも納得できるな。政治的中立ってどうやるのか。でも逆に、教員として面白い授業をつくりたいという思いで、私もすごく戸惑いながらやっているというのが現状です。

次にシティズンシップ教育、神奈川県のお話をさせていただきたいと思います。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、神奈川県では参議院の通常選挙に合わせて、模擬投票というのを実施しています。今年度は恐らく4回目です。今回から18歳選挙権も入ったということで、さらにシステムができてきました。今までは各学年だけでもいいというかたちだったのですが、多くの学校では、全校で模擬投票を実施する高校も増加してきました。

ただ、本校定時制については4年生までであるのですが、

今回は3学年のみというかたちで行い、事前指導としては日本史授業を2時間と、ロングホームルームの時間を1時間、そして事後指導、投票結果とかについては日本史の授業1時間。ロングホームルームで1時間発表というかたちを取りました。

模擬投票とか、主権者教育というと、さっき小学校、中学校の先生の話にもありましたけど、どうも社会科という話になります。ですが、これはシティズンシップ教育の一環でやるんだから、グループ分掌としてやるべきじゃないかという話がありまして、グループ分掌として行いました。

自由投票ということで、これは神奈川県での模擬投票の方法としてもいわれているのですが、授業中には絶対やらないでくださいとなっております。そのため、休み時間なり放課後なり、朝とかでもいいですけど、そういう時間をということで、本校の場合には放課後に実施しました。

先ほど話したように、事前指導、事後指導ということをやったのですが、グループの中の発言で、自由投票の原則と授業で投票を行うことの兼ね合いで様々な意見がでました。議論を聞き、教員に対する主権者教育、政治教育というのも大切なのかなということを感じました。

今回、投票をやりましたが、県全体としては推進しようとしているのですが、具体的に実施していったり、いろいろなことをやってくれるのは各市町村だったり、横浜とか川崎では各区の選挙管理委員会なのです。

前回は、うちの学校は神奈川区ですが、神奈川区の選挙管理委員会が選挙公報をくれたりとか、いろいろと資料を提供してくれたんですけど、今回は躊躇されたというか、あまり対応がなくて、前回と違って、選挙公報とかを生徒に渡すことができなかったということありまして、誰に投票して良いのか分からないという、戸惑いもあったというのが現状です。

3番目です。模擬投票も今回あるし、18歳選挙権も導入されたということで定時制で今回、私が実践した政治に関する授業をご紹介します。

お名前ぐらひは聞いたことがありません。社会学者の古市憲寿さんが書かれた中に、要するに「今の若者とかは、べつに政治に関心がないわけじゃないよ」、「地道なところからやっているよ」、ということが書い

てあります。

そこで、要するに「18歳や若年層も関心があるのだっ
たら」、というところに目を付けまして、「身近な問題
から政治というものを考えられたら」、というところ
でつくった授業です。

定時制の取り組みとして、入ってすぐの高校1年生
の1学期中間試験で、「学校をよくするには、学校を
改善するには、あなたはどんな意見がありますか」と
いうことを書いてもらいました。多くあったものとし
て、本校は、自動販売機が少ないので、自動販売機を
つくってほしいとか、あるいは体育館に給水器が無い
から、給水器をつくってほしいという意見が出ました。
また、自販機だったり、ロッカーの建て付けだったり、
全日制との触れ合い、という意見も出ました。

ではこれってどこにもっていけばいいのだろうとい
うところで、一つは、生徒総会とか生徒会にもってい
くということが大切だよねと。実はもう一つ、手段が
あるよということを話しました。意見をかたちにする
もう一つの方法として、役所や議会に伝える。これは
よく小学校とか中学校だと、役所の人を呼んで、とい
うことをやるかもしれませんが、高校ってあまりそ
ういう取り組みがないと思ったのです。

私は、18歳選挙権になって、これって逆にチャン
スじゃないかと思ったのです。18歳選挙権で、彼ら
が投票を持ったということは、政治家にとっては味方
に付けたほうが有利じゃないかということもあるから、
彼ら18歳、若年層の意見というのを取り入れる必要
があると考える政治家もいるんじゃないかな、と思っ
たのです。

そういうところで、もともとのレジュメに戻ります
けど、生徒会に働き掛けるという案と、もう一つは今
お話ししたように、県議会の各会派とかに要求を出す
ということ。そうすると今いわれているような、例え
ば「シルバー民主主義」といわれることに対して、言
葉としてどういう言葉がいいのか、今、私がたまたま
つくったのですが、「ティーンズ民主主義」というべ
きか、シルバーじゃなくて、逆に「若葉民主主義」と
いう言葉がいいのか分からないのですが、こういう
ことがあってもいいのかなと。

先ほど堀田先生が言われたように、町長が生徒とミー
ティングをするというの、ひょっとしたら何年後か

にその子たちが選挙権を取るわけだから、町長にとっ
てはいい自分の選挙活動にもなるのかも、ということ
を考えれば、こういうこともありなのかなと思いました。

私は今みたいに政治家に、各会派に手紙を書いても
いいかという話を、一応事前に管理職とかに相談した
ら、それは場合によっては、逆に利益誘導とかになる
のじゃないかという指摘を受けて、最終的には躊躇さ
れて、できなかったんですけど、ただ取り組みが進ん
でいる学校に聞くと、神奈川県内じゃないんですけど、
18歳選挙権の副読本、『私たちの輝く未来』を作られ
た林大介先生に伺ったところ、それをやっている高校
などもあるし、逆にそういうことがあってもいいんじ
ゃないかという話も伺いました。なので、これからそ
ういうことも考えていこうかなと思っていました。

僕が今、考えている話としては、やはり「足元の身
近な問題から政治というの、あるいは社会というも
の」に関心を持たせて、改善していくというということ。
それで児童や生徒が何か変わっていったということが
あると、また「自分たちが社会を変えられるのだ」と
か、あるいは「よりよくできていくんじゃないか」と
いう実感を持ってもらえればと思います。

主権者教育～「現代社会での取り組み」

そして、大きい4番に入ります。これは2012年度に
行った実践です。「現代社会」の授業で同じく行いま
した。これは単元全体の計画ですけど、行った授業と
して、行政や政治というものを考えていく中で、やは
り政治って分からないよね、選挙って分からないよね、
どうしたら伝えられるか、ということで行った実践に
なります。「映像資料」を使った実践です。この中で
小学校、中学校の先生方で、木村拓哉が出ていたドラ
マの『CHANGE』って、ご存じの方はいらっしゃる
ですか。いらっしゃいますね。授業の実践とかで使わ
れたことがありますか。これは、授業の中ですごく使
える教材だと、私は思っているのです。

実は自分が小学校の教員をやっているときにも、国
会の中とか選挙の仕組みを教えるのにも使ったことが
あるのです。つまり一般的に政治とか選挙というもの
を、どうも自分たちが投票する側からしか見たことが
ないけど、これって実は一介の小学校教員が国会議員

になるというストーリーなのです。

国会議員から、最終的には総理大臣まで上り詰めるというもののなのですが、そういう中で選挙の当事者という動きも出てくる。そして今お話ししている、もともと小学校教員だったということもあるので、「僕を小学校5年生だと思って説明してください」という言葉も出てきて、非常に分かりやすく政治の話が出てくるのですね。

本会議とか、例えば常任委員会とか、国会の中にあるのが分からないから、もうちょっと分かりやすく話して、というときにどんなことが出てくるかという、それは小学校5年生に説明できるようにしてくれよという話で、そうしたら相手の秘書が生徒総会というのが本会議、体育祭とか文化祭の委員会は特別委員会とかっていうふうに、小学生とか子どもにも分かりやすく話をしているところもあるので、使えるのではないかなと思います。

次に今度は自分たちで選挙の、投票する人間になってみようということになって、行ったのがまず一つの、『沈黙の艦隊』を使った実践です。

これは、もともとは、私の恩師が小学校でやった実践を、私なりにちょっとアレンジしたものなのですが、漫画資料をずっと見せていって、では、あなたはこの4人の総理大臣候補者の中で誰に投票しますかと問い、投票をします。最終的になんでそれを選んだかという話もさせて、2回、投票を行うということをやりました。

さらにメディアリテラシーの一環として行った実践もあります。「毎日新聞」の「都議選」という上のところに、本来あるタイトルを消して見出しを付けさせるという実践を行いました。ヒントは、党派別当選者というところから考えてタイトルをつける、ということなんです。

実はこれは毎日新聞の本来の見出しだと、「小泉効果で自民が勝利」と書いてあるんです。でもこれをよく見ると、実は自民というのは、前回より議席は1議席減らしているんだよ、でもこういう見出しが出ることによって、「一般の人々の世論は、惑わされちゃうことがあるよ」、というところが漫画に描かれているのです。こんな種明かしをして、メディアというところの情報の流れに流されるということの危険性などを伝えました。

時間も来ましたので急ぎますが、こういうメディアリテラシーなどをやったりする中で、生徒の感想として、「見出しの付け方によって読者に与える印象は変わる」とか、そんな話が出てきました。

そしてやはり主権者教育とか、そういうものは暗記だけではいけないのではと思いまして、さっき堀田先生の話ではないですけど、「次の問題を読み、後の問いに答えなさい」みたいな、これもK県H町って、私がまさに葉山町出身で、そういう架空の町としてつくったんですけど、3万人の小さな町で、隣町との合併問題が起こった。

要するにリコールとか、あるいは条例という言葉は、例えばリコールだったら、リコールをするのに3分の1の署名が必要だとか、条例を作るには50分の1が、という数字だけは知っているけど、しかし数字を覚えていても、実際に活用できないのではないかということも思ったのです。たぶん中学校とかで、今は教えませんかよね。だけど今度、高校に行ったら、最終的に彼らは主権者だったり、もうあと何年後かに投票に行ったりということを考えたら、どう活用するかということが大切になってくると思うのです。

正解の生徒はやはり50とか3分の1とかっていうのを全部使えて、できた生徒は1人ぐらいだったのですが。でもこういうところの使い方を知らない、やはり最終的には、いろいろと自分たちが考えるときに大切になってくるのかなと思いました。

政治が身近なものに感じられれば…

そして最後ですけど、小学校、中学校でどんな主権者教育に取り組めるのか。高校からの立場で、偉そうな感じで申し訳ありません。小学校6年生は私なども自分が授業をやっていたり、中学校の歴史などの教科書を見させていただいたりする中で、今日も先ほど皆さんにビラを配らせていただきました。最近、田中正造などは、小学校の教科書では抜けているかもしれませんが。大正デモクラシーや田中正造が公害問題で意見を言った、「声を上げた」と。それは「なぜ声を上げたのか」、やはり「問題があったから」だと。声を上げるということも一つ、大切だと思います。

さっきのビラの中にもあったのですが、私はこうい

うのを書かせてもらって、まさに歴史の授業では大正デモクラシー、田中正造から始まるあの時期というのは、やはり今の政治にも関係するような、人々が誰でも声を上げられる時代になっていったのかなと思っています。

ちょうど小学校や中学校でも、平塚らいてうや田中正造や、デモクラシー、尾崎行雄というのが出てきたので、こういう人物や時代を活かした授業もあるのかなと考えています。そして先ほども話しましたが、ドラマの『CHANGE』などを活用すると、現実の政治もみえてくるのかと思っています。

「政治というのを身近に感じられれば」、というのが私の考えです。先ほどもお話ししましたが、自治会、児童会や生徒会も含めて。今、文科省の、18歳の副読本などを見ると、自治活動というか、生徒会、児童会の自治活動というものと、今回の政治のこういう問題は、できれば切り離して考えてほしい、みたいな感じの考えがあるそうなんです。

そうじゃなくて、やはり一番の基本って、児童や生

徒が活動する自治というのは、さっきの先生方じゃないですけど、クラスの中でどうするか、クラスの問題をどうするかというところから始まるような、身近なものから考えていくということが大切なんじゃないかなと私自身は思って、「身近な問題、あるいは自分たちの身の回りのことを、これも政治なのだということを教えていく、あるいは伝えていくということが大切ではないか」と考えているところです。

ちょっと時間が過ぎましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

(拍手)

○坪谷：ありがとうございました。大変豊富な事例、活動や課題を出していただきまして、とても勉強になりました。またこの後の質疑・討論のほうで、私たちが一緒に共有して、深めていきたいと思います。ではいったんここで、シンポジスト3名の方からのご報告は終わりということで、休憩に入りたいと思います。



■質疑・討論

○坪谷：それでは第2部の、質疑・討論の時間のほうに移っていききたいと思います。

ここからは各先生方へと、また、3人の先生方への共通の質問ということで、挙げられたものに関してお答えいただき、それから少しディスカッションなどもできればと考えております。

まず、齋藤先生への質問ということですが、どうしても教科だと社会科に片寄りがちになるし、「特活」や「総合的な学習の時間」に任されてしまう。しかし、普段の教科教育の授業こそ、改善への一歩ではないかと思います。先生への追随とか、多数に流されがちな現状を見てみると、考えることをやめさせないということが、第一歩なのではないかと思います。「小学校のほかの教科でも、こういった主権者教育的な視点を意識されることがありますか」というご質問ですが、いかがでしょうか。

○齋藤：ありがとうございます。考えることをやめないというのは、私もすごく大事なことだなと思います。先ほどの話の中で、私は問い続けるということ大切にしていますと言いましたが、問うためにはやはり問題意識というのをしっかりと子どもたちが見えないと、何について考えるのか分からない。

学級でいうと「学習問題」という言葉を使ったりしますが、一人一人の問題意識を共有してできた問いを学級みんなで解決していくということに対して、社会科の言葉でいえば「社会的事象を通して」とか、各教科の言葉でいえば、その教科に合った内容をしっかりと活用しながら考えていく。教科の目標と考えれば、そういうことは大事なかなと思っています。

実践ということで、川崎では先ほど「社会科」「総合」、それから「特別活動」を中心に、ということをお伝えしましたが、私もいくつか意識してやってみました。今は6年生の担任なので、内容がつながりやすいという学年ではあるかなと思います。1年生だと例えば「生活科」の、アサガオを育てるところでも、僕は意識できるのではないかと思います。

ただアサガオを育てるのではなくて、例えば毎日お水をあげている子どもに、「毎日お水をあげて偉

いね」で終わるのではなくて、「どうして毎日お水をあげているの？」と言うと、たぶんきっと1年生などは「とてもきれいなお花がたくさん咲いてほしいな」とか、「ぐんぐん伸びて、成長してほしいな」と答えるのではないかと思います。

「そうか、そういうお水を咲かせたいから、毎日水をあげているんだね」という声かけ一つでも、主権者教育の、先ほど言った主体的ではないですが、子どもたちの今行っている活動、行動にしっかりと価値付けしてあげるということで、1年生としては、主体的というところにつながってくるのかなと、考えます。

6年生でいうと、例えば国語の中で「未来がよりよくあるために」という、意見文を書こうという単元があります。国語の学習なので、意見文を書くためにはどうしたらいいか、どういう文章構成が必要か、相手意識、目的や意図を明確にしようという、国語で身に付けさせたい力はあるのですが、やはり自分が意見を持てないと、中身のない意見文になってしまいます。そこで、意見文の中でどんな題材を取り上げるかというのは、すごく私も大事にしました。

ある子は「未来がよりよくあるために」というテーマに対して、教育を受けるということがとても大切なことなのだという意見文を書いた子がいました。市ヶ谷にある、JICAというところにみんなで見学に行きまして、自分たちが学校で教育を受けているということは当たり前ではない、ということに気付いた子どもの意見文です。

小学校の学習は、なかなか問題意識を持とうとしても、子どもたちにとっては当たり前のことばかりなので、その当たり前に「はてな」を付けて、問いをしっかりと見いだしてあげるとすることは、大切なことかなと思っています。

この子は、自分から学ぼうとする気持ちを持って勉強することが、一人一人がしっかりとした考え方を持つことが、社会をよりよくしていくことにつながるということを主張していました。内容の面でいうと、こういうところも主権者教育につながっていくのかなと考えます。

あとは、例えば道徳の授業で、価値項目の「郷土愛」というところをテーマに取り上げたときに、NHK

の「ココロ部！」という、アンジャッシュさんがやっている道德の番組があるのですが、そういうのを活用して、自分たちの村をこれからどうしていくかという内容の問いがあった番組だったのですが、そういうものを活用しながら、私はこの町をこうしたいほうがいいと思っている、でもそうじゃない人もいるのだね、どちらが大事なのかと考えるような学習でした。

どちらが大事かを決めることが大切なのではなくて、一つの物事をつくり上げていくときには、いろいろな人の意見があって、その意見をしっかりと取り入れながら、本当にこの町に必要なのは何かと考えていくことが大事なのだ、という学習の結末でした。

国語や道德、あとは運動会でいうと体育の表現活動で、自分たちがどんなことを伝えたいかな、といって動きを考えていく、メッセージを伝えるための体の動きを捉えていく、そのためにはみんなでどんな表現をしたらいいかな、こういうこともつながっていくのではないかと考えています。

○坪谷：もう1点ありまして、「1年から6年までで、どういう段階で自分自ら考えさせ、問いを立てさせるとか、どのような手順で育てているのか」、という質問です。

○齋藤：資料の中に、本校では6年の3月にこういう子どもを目指しますということで、書かせていただきました。学校でこれを見るとときにやはり、1年生とか2年生でも同様にしたいほうがいいのではないのか、という意見が出ました。

ただそれをするのは、恐らく言葉の操作で段階を付けようとすると思うんですね。1年生ではこれが大事だ、2年生はこれが大事だ、3年生ではこれが大事だという、違いを出そうとすると、どの言葉で段階を付けていったらいいのかなというところに、すごく時間がかかってしまうのではないかなと思います。まして、本校では、まずは3月に向けて、しっかりと具体的な姿を出そうと。そこに向けて、では1年生では何を大事にする、2年生は何を大事にするということを、各学年の学年経営の中で表してもらいました。

例えば2年生ではこうすると考えるときに、恐らく2年生のことだけ考えないですね。本校の2年

生は、と考えるときには1年生のことや高学年のこととも恐らく考えて、こういうことが必要だね、この子たちにはこういうことが大切だね、と考えると思います。これが恐らく段階になっていくのではないかなと捉えています。

そういうのを共有して、みんなでお互いに理解し合って取り組むということを、1年生から6年生まで段階を付けて、という捉え方をしています。

○坪谷：ありがとうございます。それでは堀田先生には1点、ごく簡単に答えられるほうの1点から伺います。

「話し合い活動が非常に盛んで、活発にできているということでしたが、小学校のときにどのような教育をされているのでしょうか」ということと、それから「具体的な実践例などを教えていただければ」、ということでした。

○堀田：中学校の話し合い活動は、例えば理科だったら、この実験結果から何がいえるのかということを、ホワイトボードを使って常にまとめることをします。国語では、この作者の気持ちをこの点に注目してまとめてみようということで、それぞれが意見交換をし、全体でシェアをし、という活動をしたりしています。つまりそれぞれの教科での話し合いの場を、設定しやすいところで時を見てというか、機会を得ながらやっていっているのかなと思っています。

全部が全部を見たことはありませんが、そうやっていろいろな教科で少人数での話し合いをし、全体でシェアをし、また個人に返ってくるというのが、大体大きくパターン化されていますね。それを何回か行いながら単元全体、あるいは1年間を通して、ということ。

特に国語がそういうのを活発にやっていますので、国語の先生はそうやって実践を積み重ねていっています。

○坪谷：ありがとうございました。

○参加者：すみません、その質問を書いたのは私なのですが、今のお答え、ありがとうございます。小学校の教員ですけれども、中学校に上がった時点で話し合い活動を活発にできて、素地ができていたのですごくやりやすかったというお話を聞いて、小学校の先生がすごく苦勞されて、子どもたちを押し上げ

てきたんだなと思って。小学校の情報をご存じでしたら、どうしてそういうふうになると中学に上がるときに、話し合いが上手な子どもに育っていくのか、そのエキスをあれば、お土産に持って帰りたいなという意味でも書きました。

○堀田：ありがとうございます。先ほども言いましたが、生で小学校の授業をちゃんと見たことないの、何ともここでお答えできないのですが。

でも、実践を聞く限りですが、やはり「どうして？」ということで課題を設定し、それを一個一個丁寧に、少人数グループを使って意見交換をするという活動は、毎回いろいろなところでやっているようですね。

そういうのを繰り返し繰り返しやるということで、「じゃあグループ活動をして」と言えば、もうすぐにできるような訓練というか、こういうときはこうやるんだとか、経験でもう分かるようになってきているようです。先生方が繰り返し指導されてきて、それが当たり前のようにになっているのかなという感じがします。

たぶん最初は、1年生とか2年生とかは絶対に難しいと思いますが、それでも何か話型を設定したり、「何とかさんの意見に近いんですが」、「こうですけど、付け足しですが」ということを設定しながら、意見交換をしたりするようなことを積み重ねている、ということは聞いています。

○坪谷：ありがとうございます。続いて加藤先生は、三つほど質問があります。一つ目は、「先ほど声を上げることが大事だとお話の中にありましたが、それを教育で、それから学校づくりに取り組むためには、何かいいアイデアはありますか」、という質問です。

もう一つは、「加藤先生は今、定時制の高校で教えていらっしゃる、当然社会人の学生さんもたくさんいらっしゃると思うのですが、その場合は、政治とか社会への現実の見え方というのは結構違っているのではないかと思いますので、そういった意味で主権者教育を行う上での課題はありますか」という問題です。

3点目は、「実際に高校生の政治的活動、政治活動というのが学内であったりとか、学外であったりとか、あるのでしょうか」、というご質問です。

○加藤：たぶん1番目と2番目は重なるところもある

ので、声を上げるということと社会人とか、同じようなかたちで、まずお答えさせていただきたいと思います。

声を上げるということと、社会人というところにも関係するのですが、現代社会をやっていると、今回も実はさっきの学校改善案なども、なんでやろうかなと思ったかという、入学してきた子たちが「この学校をこうしたらいい」というのを、逆に授業中にぼつんと言いだめたんですね。そういうところから声をすくって、では、中間試験でこういうのを出すよ、ということをやりました。

あともう一つ、社会人の話。定時制だからだけではないかもしれませんが、今の高校生は、うちの場合には定時制だからかなり多いのですが、アルバイトをしている子が、学年が上がればどんどん多くなっていきます。そうすると今はもう一般的な言葉になったブラックバイト、名前は言いませんけど、某牛丼チェーンなどで働いている子がいて、1年生で働き始めてから頻繁に、「先生、僕は今日、5時で終わる予定が、5時半まで残りました」という話もばんばん出ます。

これはまさに現代社会の問題で、だから私などは今、定時制にいますので、労働教育などを一生懸命にやるんですね。そういう中で、某牛丼チェーン以外にもいろいろな問題があったりして、だから生徒などに対処の方法も全部教えていくんですね。

それで、声を上げるにも関係するのですが、私は、労働教育をやっているNPOのPOSSEという団体があって、ブラックバイトなどを取り上げて、学生の労使問題に取り組んでいる団体があります。働いている子たちがいると、法的措置を取るのを手伝うよという話もあるし、逆に今の法律上の問題なのだから、それを変えるという方法もあるよということをお話しています。

だから政治と法律というもの、政治と社会というものが、定時制の場合はつながっていると思います。社会人と、学生で考え方が違うということもあるかもしれませんが。

見ていると実は今、定時制ってほとんどがアルバイトの子なんですね。正社員の子がいないのが現状で、アルバイトだったりという子が大半で、あとは

バイトをしない子です。なので、今みたいなブラックバイトの問題が多いかなというのがあります。

そういう問題について、法律だとかの相談機関を紹介する、あるいは声を上げるということで、本当に普段のホームルームや授業中にぼろっと言ったことを、具体的にどう対処できるのか、というように授業を組み立てているというのが私の方法です。

もう一つが、政治的な活動のお話ですが、校内で誰かが政治的活動をするということについては、今出ている副読本の中でも、校内では禁止されているということで、特にありません。

ただ、ちょっと別件ですけど、校外、正門の入り口辺りで時折いろいろな政党が、ちょうど私の高校はすぐ近くに大学もあるので、どっちの学生を狙っているのか分からないのですが、この間の給付型奨学金のときにアンケートや署名をやっていたりとか、そういうのを見かけることはあります。

一応、校内とかでは、これは全国的にだと思えますけど、禁止されているので、生徒自身が動き出すということはないですけど、さっきみたいな労働問題、労働法などについては教員側から、相談に乗るということもあります。

あと、実は坪谷先生のほうから話が出てくるかもしれないですけど、鶴見総合高校と先生は関わっていると思うのですが、実はそこの学校の生徒は、教員と生徒が一体になってブラックバイトみたいな会社に対処したなどという話を、私は伺ったことがあります。

○坪谷：ありがとうございました。

ここまでが一応、それぞれの先生へのご質問ということだったのですが、あと3点ほどは、3名の先生方にそれぞれ共通する問題かなと思ひまして、それぞれ伺ってみたいと思います。ちょうど堀田先生の取り組みの中で、「中井町に鉄道を通してほしいという、その要望に関してはリストのほうから外されたということでしたか」。

○堀田：それ以外で。

○坪谷：それ以外で、ということでしたよね。それはなぜでしょうかという質問で、むしろ中井町が地理的に鉄道を通すにふさわしい場所、これは経路とか用地の買収とか、道路との接続、人の流れなど、社

会科の勉強の観点からも、非常に興味深く学ぶことができる材料がたくさんあるのではないかと思います、ということだったのですが、3人の先生方とお話ししたところ、いろいろな考え方があるんじゃないかなと思ったので、先生方にいろいろとご意見を聞いていきたいと思います。まず堀田先生からでよろしいでしょうか。

○堀田：ありがとうございます。まず、なぜ鉄道を外すかという、鉄道だけにこだわってしまって、ほかのいろいろなアイデアが出にくくなるということがあります。いろいろな面から中井町のことを考えてほしいという気持ちもあって、鉄道以外ということを指定したというか、そういう制限を付けたというのがあります。

鉄道を通すことは、やはり町民にとっても、さまざまなメリットが出てくるとは思いますので、鉄道それ自体を全て否定するとか、そういうことではないのです。ただ、鉄道を通すメリットはこういことととか、デメリットはこういことと、ということを考えながら、それが町にどういう影響を与えるのか、ということを考えるような展開にすることはとても大切なことです。町のことを考える上では非常に大事なテーマになるのかなと思います。

ただ実際問題、これは本当に個人の考えなのですが、鉄道を通していない理由というのはたぶん企業側のいろいろな、土地、地形の問題、あるいは利益がなかなか取れないとか、そういう面もあると思うので、町をとおして考えるようなところじゃないところも考えなきゃいけなくて、ちょっと複雑になってくるのかなという気持ちを僕は持っています。

だから3年生であると、経済などの勉強をするので、そういう面も含めていろいろな面から考えることができると思うのですが、2年生とか1年生の段階では、経済活動とかを含めて町のことを、全体を考えるのはちょっと難しいかなと思いました。

○坪谷：ありがとうございます。では齋藤先生に伺っていいでしょうか。

○齋藤：小学校の学習の視点でということで、今、短時間で考えてみたのですが、社会科の中でも鉄道を扱う、交通網を扱うというところかというと、地理的条件を考える、例えば4年生の社会科の県の学習、

それから3年生の町や市を学習するときに、どういう視点でその土地を見ていくかというときに、地形や歴史的建造物、それから土地利用とか、さまざまな視点で見ていく中で、交通網という視点も入っていきます。

なので、交通網を見ると、その県の発展とか発達というのは確かによく分かるのかなと思います。そこに駅があってレールがあるには、やはり理由がある。何も理由がない所に駅はできないと思っています。その理由を考えるというのは、小学校のその学習ではあまりありませんが、ただ、そこに土地の利用、人の流れが関係あるのではないかと考えることはできます。

例えば私の学校がある川崎は、工業の発展から町が栄えた場所なので、工業地帯に住民が七十何人しか住んでいませんが、臨海部を通る鶴見線という電車があります。これは歴史をたどると、浅野総一郎という方が工業地帯の埋め立てを作ったことで開通したわけです。

今日の現状を知るということが、何か意見を出すときにはとても大事なことなんだ、というのを子どもたちが考えるのは大切なと思います。

小学校の子どもでいうと、公園にごみ箱を置いてほしいと、地域の方をお願いするのですが、私たちのころはもちろんあったごみ箱が、今は当たり前のように無い。その無くなった背景は、私たちは知っているのですが、子どもたちはごみ箱が無い公園が当たり前で、ごみはポイ捨てするなというんだったら、ごみ箱を置いてくれたら、僕はちゃんと捨てるのに、と言うんですね。だからごみ箱を置いてほしい、と言いますよね。

でも、なんで無いのかと考えるような、マイナスで学習するということは、小学校ではないのですが、やはりそうやって「ああ、そうか、こういうことがあったから、今はごみ箱がないんだな。ではどうしたらいいかな」と考えることは大切なと思います。なので、何でもかんでも声を発することが大事というか、そういうことを知るということが、これから一票を投じるときにも、大事な判断材料になるのではないかなと考えます。

○坪谷：ありがとうございます。加藤先生の視点から

はどうでしょうか。

○加藤：たぶん中学校の堀田先生に言っていたように、高校であれば、やはり僕はこの授業をやって、そこは考えてもいいのかなと。そこで、やはりメリットとデメリットを、高校であれば、政治的論点になるのか分らないですが、そういうふうには鉄道が通る、例えばデメリットはこういうこと、メリットはこういうこと、もちろん環境破壊の問題とか、利便性の問題とか、いろいろ考えさせる。それを提示するということが大切なかなと思います。

逆にさっきの話ではないですが、公民をまだ勉強していないという話でしたが、公民の分野を勉強してからの方がいいということもあるのかもしれない。そうすると生徒、子どもたちというのは、経済的な理由や、さっきの地理的理由をバックボーンにして、だから必要なのか、逆に必要じゃないのか、ということを考えていくということ、それと現実の社会的に造れるかどうか、ということを考えていくのが大切なかなと思いました。

シミュレーションみたいな感じになるかもしれないけど、やはりそうすると理想ばかりではなくて、政治というものを身近に、あるいは現実的にも考えることができるのかなと、聞いていて思いました。

○坪谷：なかなか難しいテーマだなと思ひまして、やはりこういうことを学ぶということは、価値から中立にはなれないという部分も、よくあると思うのです。私が読んだ副読本の中では、政治的中立性はすごく大事だとか、何度も何度も繰り返して書いてあるのですけれども、やはり価値の問題ですよ。

自分の町に鉄道が通っていることはやはり便利だという、そういった価値観から逃れることはできないし、逆に鉄道が通っていない町の価値というのかな、そういうことを考えるということも大事ですから、それはやはり政治的中立性だけでは済まされない問題で、だからこそそういったところから学びのチャンスというか、芽みたいなのが結構あるのかなと。ありがとうございます。

あともう1点、これは3名の先生方へということで、神奈川県らしいなと思ったのですが、「外国人の児童・生徒が増えていく中で、主権者教育をどう進めていけばいいのか、何か注意する点があれば教えてください」

さい」、ということです。加藤先生に、実際に高校の中にそういう生徒さんが多いということだったので、お話しいただけますか。

○加藤：先ほど話したように通常選挙で、私が今の学校に来て2回目の模擬投票をやりました。前回のときに、うちの学校の場合は定時制なので、選挙権を持っている子や外国につながる生徒もいました。

授業で、日本の場合には、現在のところ外国人についての参政権はないよという話は触れましたけど、あと一般的な、こういうこともあるよという話をしました。今回は外国につながる生徒はいません。日本では今の法律ではできませんが、模擬投票自体は、やることは問題ないので投票を実施しています。

○坪谷：この問題は、特に神奈川県では避けて通れないことなのかなと思うのですが、やはりこういうことを考える上で、実は2件の質問を寄せてくださった方がいました。納税していながら参政権を制限されている子どもや親御さん、そういった人たちに主権をどう考えさせればいいのか、というご質問でした。

本当にこのこともすごく大事な問題だと思うのです。参政権というのは、もともと納税しているからもらえるものではないので、むしろこれを考えると戦前の、お金持ちでないと投票できないとか、そういう制限選挙の時代に戻ってしまいます。

やはり加藤先生からもあったように、例えば私が関わっている、外国の子どもたちが多い高校では、やはり模擬投票のときに、外国籍の人にも国政選挙の投票権を認めている国があるとか、地方選挙の投票権を認めている国があるとか、提示をして。

またこれは、外国籍に限らないと思いますが、先ほど条例の例を考えるという実践でもありましたけれども、住民投票の事例でも、やはり投票できる年齢も下がってきますし、実際に外国籍の方も住民投票に参加できた例も日本でもあったりします。ですので、要は単に選挙権の有無というよりも、もう少し広い視野で、同じ地域の未来というか、将来を担っていく人間だという、だから同じ住民だみたいな意識をどれだけ一緒に持てるかということですね。もちろん選挙権が制限を受けているということは非常に大きな問題で、これは問題視しないといけなし、このこと自体はやはり問うていかないといけないと

は思うのですけれども。

最後の質問ですけれども、先生方の中で、中学校以上でしょうか、生徒会の役員選挙に関してですが、「実際に主権者教育の事例として、教材として使っていく場合に、選挙結果とか得票数みたいなものが、校内では公表されるのかどうか」、ということですが、いかがでしょうか。

○堀田：私のいる学校では、生徒に得票が何票入ったとか、何票の信任があったとかは一切、公表はされていません。その結果で、やはり落ち込むこともあるだろうと。

やはり公表することで、自分がどれだけ信頼されているのかというのを、間近に知ることにもつながっていくことにもなると思うので、子どもたちのそういう内面的なところにも配慮して、気持ちなどにも配慮して、私の学校では生徒には直接は、何とか君は何票というのは公表していません。

ただ、職員室内では誰に何票入った、誰が何票で不信任だったというのは、職員の中では、証拠としては渡ってはいます。

○坪谷：ありがとうございます。そうしましたら、時間も随分迫ってきていますので、最後に先生方から一言ずつ、本日の感想などをいただけたらと思います。

シンポジストからのメッセージ

○齋藤：ありがとうございます。主権者教育だけを考えて、その主権者教育が、投票する子を育てようと捉えてしまうと、これは違うのかなと、やはり思います。私たちは一教員ですので、例えば社会科を教えるのであれば社会科の目標があって、単元のねらいがあって、そこを達成するというのがやはり大切なのかなと思います。その中で、何を学んでいくのかというところが大事なのかなと思います。

ですから、今日のシンポジウムのテーマというのは、すごく大事なのではないかなと思います。まずこの「主権者教育」といわれていることは何なのか、主権者に必要な力って何なのか、それをどう育てていくのか、というところが問われているのではないかなと考えています。

ですから、内容だけで迫ると、やはり間違えた捉えとか、難しさが出てくるのかなと思います。子どもたちをどんな子どもたちにしていきたいか、そのために今日の授業で何ができるかと考えていくことが、改めて大切なことかなと感じました。ありがとうございました。

○堀田：今日、小学校や高校の先生の話聞いて、自分がやっていることは小学校でも共通しているし、高校でも共通している部分がすごく多いなということを感じました。

だから自分が、中学校なら中学校だけの視点で主権者教育というか、主権者の意識を育てるということではなくて、本当に今の時代だからこそ、小学校や中学校、高校の先生と、できる面は協力、連携しながら、小中高の12年間で、主権者としての意識を育てていくことがすごく大事なんだな、それが投票行動とかにつながっていくのかな、というのを今日は改めて感じました。

今後も小学校の実践、あるいは高校の実践も理解しながら、中学校でやっていることがどう高校へつながっていくのかというのを意識しながら、日々の授業をやっていかなきゃいけないのかなと、すごく感じました。ありがとうございました。

○加藤：今日はありがとうございました。お二人の先

生も言われていることですが、主権者教育という問題は、高校だけ、中学校だけ、小学校だけという問題ではなくて、まさに主権者教育って一本の串だと思うのですね。だから小学校ではどのような主権者教育を行うのか、そして中学校はどのような、それで高校では、ということ。そして、全体ではというふうに考えていく必要がある。逆に小・中・高が連携できるテーマなのかなと、今日の話聞いて思いました。

今日の話ではないですが、「身近なところ」だったりとか、そういうところから考えていく、あるいは「社会にどう関わっていく」ということを考えていくことが、小・中・高で必要かなと思いました。

今日はありがとうございました。

○坪谷：3人の先生方、どうもありがとうございました。拙い進行でシンポジウムを進行してまいりましたけれども、他人事ではなく、「自分事」として考えることの大事さとか、自分の思っていることを相手に伝え、相手の意見を取り入れながら、自分の意見をまた再構築していくという、まさにコミュニケーションの場が、ちょっと社会的で、専門的な言葉ですが、ハーバーマスという社会学者が、近代の公共空間というのはコミュニケーションの場である、ということを書いていましたが、まさにそういったこと



が学級とか、学校という運営の中で実践されているんだなということを、私自身が今日は非常に勉強させていただくことができました。

それから小・中・高での連携も、ずっと続くのだということ、そして私も大学の教員としては、それを大学で、専門学校や短大で、それから社会人になっ

て、どういうふうに学び続けていくかということも、とても大事な事なんだなということを、改めて認識させていただく機会となりました。

本日は本当に3人の先生方、また今日、ご来場の皆さま、ありがとうございました。

(拍手)



